
忌み子

影雅 羅尉弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忌み子

【Nコード】

N1034R

【作者名】

影雅 羅尉弥

【あらすじ】

北俱盧洲の賽ノ地。そこへやってきた良介と雪姫は盗賊狩りに巻き込まれながらも、気ままに生活しようとしていた。だが、現実はそのもいかず……。 ※この作品はみてみんなで参加させていただいている「コラボ侍」のサイドストーリーです。これをお読みになる前に、まず早村友裕様作の本編もあわせて読むことをおすすめします。

良介（前書き）

> i 1 9 0 7 0 | 1 3 2 1 <

良介

『……お前の目には……何が見える……?』

「……何も」

『……ふっ。実に、お前らしい……答えだ、な……』

『知ってる? あの子、親に捨てられたのよ……』

『あらまあ、それは可哀想に……』

『誰か引き取ってくれないもんかねえ……』

『無理よ。だってあの子、忌み子じゃない』

『おい! お前親に捨てられたんだってなあ! 流石忌み子だ!』

『ははっ! 一人で寂しくないかあ? 忌み子さんよ!』

『意外と平気かもよ? 妖怪と仲良しかも!』

『あはははっ! 忌み子は妖怪と仲良しだ!』

「クソッ!」

「わっ!?!」

目を開けて周囲を見渡す。相変わらず荷台に乗っている。少しでこぼこした道が丁度よい揺れを生み出し、それで寝てしまったようだ。

「嫌な夢だぜ……」

「へえ? どんな夢?」

馬を引く雪姫ゆきひめが尋ねる。

「別に、昔の事だ」

「ふうん……。あ、良介りょうすけ。それより、もう『賽ノ地』さいこのちだよ」

「……そうか」

北俱盧洲ほつくるしゅうの北に位置する通称賽ノ地。俺達はそこに向かっていた。
「……賀茂川かがわかあ……。盗賊狩りが施行されてるらしいから気をつけないとねえ……」

「ハッ。別に構わねえよ」

「そんなこと言って……」

雪姫そこまでいった時、

「その者！ 止まれ！」

後ろから声が掛かった。

「ってホントになったあ……」

「お前は黙ってる。……何の用だ？」

後ろであわあわ言っている雪姫を放置し、役人らしい服装の人間共に向き直る。

「貴様ら、盗賊だな？ お触書に則り、貴様らを処罰する！」

「ねえ良介、本当に誤解してるんだけど」

「知るか……。あー確かにここにいるが、来たのはついさっきで、しかも旅の者だ。盗賊なんかじゃあない」

「ほう……」

役人の一人が考えるそぶりをする。

「……盗賊はよくそんなことを言っているな」

「そうなるか！」

「おい！ 掛かれ！」

役人の一人が叫ぶと、後ろについていた他の役人らしき人間が刀を手に突っ込んできた。

「……チッ、面倒をかけてくれる……」

横に置いてあった刀『アメノムラクモ』を取り出し、荷台を降りる。

「はあっ！」

役人が斬りかかる。それを余裕をもって避けると、『アメノムラクモ』を構える。

「神技、壺ノ型。『風神』」

つぶやきと共に勢いよく抜刀する。『風神』とは抜刀術、速さをもって大気を切り裂き、そこから生まれる衝撃波で刀の届かない切っ先の四寸先まで切り裂くことが出来る。

役人は二人同時に地に伏した。

「あれは……、神技ではないか？ たしかあれを習得した人物は開祖ただ一人……」

「そうだ。俺が『神技』開祖。良介だ」

「そうか……それほどの人間が盗賊になるとは……世も末か」

「そこは変わらねえのか！」

「ええい！ 臆すな！ 全員かかれ！」

「あークソッ！ 参ノ型、『月夜見』」

それはまさに刹那。一人を残した役人以外全員が一瞬で斬られる。

「なっ！？」

「どうだ？ 速いだろ？ 忌み子はここまで出来るんだよ」

「忌み子……？」

「終わりだ消えろ」

刀を役人に振り下ろす。だが、ガキンッ！ と何かにぶつかる音がただけで、役人まで届かなかった。

「何？」

「そこまでしてもらおうか。良介とやら」

「……誰だ貴様」

思い切り敵意を込めて現れた男を睨む。

「おーおー怖いね。ま、役人様の助っ人ってところかな」

「ならお前も消えろ」

一瞬で相手の懐に入り込み、刀を振るう。

「ふうん……なかなかやるんだねえ……」

やはり何かに防がれたようだ。

「お前夜叉か？ それとも……羅刹狩りを行っていた側か？」

「さあ？ どっちでもいいじゃない」

「だ。式ノ型。『天照』」
あまてらす

何手もの『風神』を繰り出すのが『月夜見』。それとは対称に、抜刀した状態で渾身の一撃を叩き込むのが『天照』。

「はっ」

だがその衝撃波でさえ、何かに遮られる。

「何か纏っているのかそれとも単に速いのか……」

「さあてどっちだろうね？」

どちらにせよ、こいつは手強くて、厄介な人物であることに変わりはない。

「……来いよ」

「……君が向かってくればいいんじゃないかい？」

……なるほどな。

「つまりお前、動かなければその何かは発動する訳だ……。おい、

雪姫、あれ寄越せ」

「はいはいー」

そう言って雪姫は黒い物体を投げて渡す。

「分かるか？ 『爆裂弾』だよ」

「くっ……」

「その様子だと防げないようだな。よし」

導火線に火を付けると、そいつの足元へ転がす。

「発破前だけ動けば！」

「甘い。四ノ型。『天児屋尊』」
あめのこやねのみこと

三段の素早い斬り技で、男を斬り伏せる。

「ふん。大したことねえじゃねえか」

爆裂弾は、とっくに導火線を焼いた。

「ニセモノだと気付かない辺りアホだな……」

「そんなことよりさあー。どうするー？ 私達こんなところで生活しなきゃだよー？」

「うるせえ。しかたねえだろうが。もう金は尽きちゃったし、服は汚ねえし」

「そうだけどー」

「とにかくさっさと空き家でも使うぞ」

「なかったらー？」

「ぶった斬って奪うだけだ」

この世に幸せという単語が存在するのなら、俺の過去は幸せだったと言えるだろうか。

『忌み子』と言われ続け、親に捨てられ、雪姫に拾われるまでの生活は、あの時間は……。

羅刹

「取り敢えず、空き家があつて助かつたぜ……」

「これで雨風は何とかしのげそうだねー」

「……さてと、これからどうするかなんだが……」

「取り敢えずお金を稼がないと……」

「つつても俺らは盗賊扱いだろ？ 雇ってくれる奴なんかいないぞ」
はあ、と溜め息をつく。

「ん？ でもそう勘違いしたのはあの人達だけでまだ広まってい
ないんじゃないの？」

「まあ、そうなんだが広まるのも時間の問題だな」

結局、今のうちに稼げるだけ稼いでおこうということで話が纏ま
った。

「よし、じゃ働き口探すか……」

「がーんばってねえー」

「……お前は どうするんだよ」

「んー？ 私はこの家の掃除したり、家事をしてるよー」

「……そうか。じゃあ何かあったらいつも通り呼べよ」

「はいはい。頑張ってるね」

それには応えず、さっさと家を出る。そもそも俺にはあんな女必
要無かつたはずだ。一人で生きて、雇われ兵士をして、戦場で死ぬ。
それが俺の生き方のはずだったのに。ていうかあの女何者？

「……さてと、どこか無いか……。というか、俺仕事とか出来るの
か？」

しばしそこで黙考するも、答えは出ない。

「……そうか」

俺の本職を思い出した。雇われ兵士だ。

「悪くねえかもしれねえな」

そう思った時、小さくリインーと、鈴の鳴る音がした。

「雪姫か！」

あの音は戦うことの出来ない雪姫が、唯一助けを求める時に鳴らす鈴。なぜかどんなに離れていようとしっかりとその音は伝わってくる。

急いで元来た道に戻る。間に合うかつ！

「おい！ 雪姫！」

乱暴に扉を開け、周囲を見渡す。異変にはすぐに気がついた。雪姫の姿はない。変わりに、男が四人立っている。

「……誰だ貴様ら……」

「いや何、うちの領域が荒らされていたのでね。『片付け』をしていたまでだ」

真ん中に立つ、少し小柄な男が答える。

「雪姫……いや、ここに女がいたはずだが？」

「ああ、いたね。最も……どこかへ逃げてしまったようだが……」
その男が続ける。

「君も、あの女と同じ仲間かね？」

「——だとしたら？」

「『片付ける』までだよ。少年」

全員刀を一本づつ。なんだ。余裕じゃねえか。

アメノムラクモを構え、頭であろう先程の男に走り寄る。

「ふむ。先手必勝、というやつだな」

中段横薙ぎの攻撃をしゃがんで避け、俺の足元を攻撃してきた。

「遅いな。お前」

飛んで避けると、後ろに控えていたやさぐれた男が、丁度俺の首の位置を斬りつけてくる。

なるほど、空中じゃ避けられないから頭との二段構えの攻撃な訳だ。

「だが、甘い！」

迫ってくる刀を鉄鞘で弾き、相手の顔面を斬りつける。

「ッがあっ！」

「安心しろ。致命傷じゃねえ。ただ、お前が光を見る事は二度とないがな」

「てめえ！　よくも啓祐^{けいすけ}を！」

三人目の男、少々大柄な男が刀を抜いて走ってくる。

「突っ走る奴は嫌いじゃねえぜ。ただな……」

腹部を狙って突き出された刀を半回転して避け、戻る力で思い切り刀を振るう。

「もうちつと頭使わねえとやってけねえぜ？」

刀は腹部を切り裂いた。

「ぐうっ」

男は倒れ込み、うずくまった。

「なんだ。もう後二人か」

「……そのようだな。仕方ない。弥一^{やいち}。死んで来い」

「ええ！？　酷くない！？」

「だってお前、使えないだろう」

「あー言ったな！？　見とけよこの野郎！　多分殺してやるよ！」

「多分って言ったな」

無駄な会話が繰り広げられた後、弥一とかいう頭に似た体格の男は刀を構えた。

「……盗賊なんぞ、所詮雑兵と変わんねえな」

「余り俺を甘く見るなよ……。いくぜ必殺！　超音速豪殺拳！」

「何だその幼稚な名前は！？」

その上、音速とか言う割には余り速くない。

「しかも刀じゃなくて拳とか言ってやがるじゃねえか！」

余裕を持って避け、突っ込む。この速度なら避けきれないはずだ。

「ぐわあ！」

だが、俺が攻撃を仕掛ける前に弥一は勝手に吹っ飛んだ。

「！？」

「くっ……超音速豪殺拳の反動が……」
あるんだ。反動。

最早どうでも良くなってしまうが、一応敵なので放って置く訳にも行かない。……雪姫も探さなければだというのに！

「……なあ、お頭さんよ」

「……なんだ」

「なんでこんな奴と……盗賊やってんの？」

「いや、こいつが勝手についてきただけだ」

「そうさ！ どうだ凄いだろ！」

「……壹ノ型。『風神』」

純粹な人間（？）を斬るのは少々心痛むが、ここではそんな情は必要ない。

哀れにも一瞬で弥一は地に臥す。

「神技……か。つまりお前は良介だな？」

「そうだな」

「そうか……なら俺の敵う相手ではないな。いいだろう。好きにしろ」

手に持った刀を地面に突き刺し、仁王立ちす頭。

「ハッ。好きだぜそういう潔さ。——死ね」

男達を片付けると、急いで表へ出る。

「どこだ……？」

リン——

雪姫の鈴が、左の方向から聞こえた。

「あっちか！」

「いた！ おい、雪姫！」

「ん？ ああ、良介か」

「ああ、じゃねえ！ てめえあの後遊びやがったな！」

最初の鈴の音を聞いてから、俺は随分と走らされた。すぐ近くで鳴ったと思って見てみるといかなかったり、随分遠くで聞こえたと思

つたら、今度は近くで聞こえたり。

「あーうん。暇だったしねえ」

「コロス」

「ごめんねー。でさ」

「あ？」

雪姫は少しもつたいぶったように間を空けると、笑いながら言った。

「ここってどこ？」

日も暮れ、辺りはすっかり夜の帳が落ちている。

「……ったく。遊んで迷うバカがいるか」

「ここにいるもーん」

もと来た道など覚えているはずもない俺達は、ひとまず近くの山へ一晚籠ることにした。

「ここってどこら辺なんだろうな……。微かだが、血の匂いがする」

「本当？ 良介は鼻いいねー。フカみたい」

「俺はサカナじゃねえ」

話しているうちにも、その違和感は続く。まるでこちらを窺っている様な……纏わりつく様な視線。

「一人……いや、二人か」

「何が？」

「出てこいよ。こんな夜だ。大層月は綺麗だぜ？」

「気付かれていたのか。人間、無族にしては中々の者」

「ていうか、なんでこんな夜中に来ちゃった訳ー？ 可哀想だよねーこいつら！」

茂みから、男と女の二人組が現れる。

「貴様ら……羅刹だな？」

聞いたことがある。羅刹は時たま、東山に現れると。

「ってことはここは東山だな。おい雪姫。地図あるか？」

「ん？ はいどうぞ」

「ちよっと。まさか帰れるとか思っていないよね？」

「よし、こっちの方角だ。じゃ、羅刹、頑張って」

「からかってんじゃないっ！」

突然羅刹男の方が激昂し、身の丈程もある大鎌を振り下ろした。

「危なっ」

「何が危なっ、だ！ バカにしているのか！」

「当たり前じゃん。羅刹がどのくらい強いのか知らんが……強いのか？」

「良介。少なくとも力では明らかに羅刹の方が強いよ」

雪姫が耳打ちする。

「へえー。成る程。よし、丁度いい運動じゃねえか」

「軽口を叩けるのも今のうちだと、思い知らせてやる！ 行くぞ封華！」

「あはははは！ いいんだねえ、どうなっても！ 金術だって死んじやってもしらないよお！ あはははは！」

ええー……。なんか封華とかいう女怖いよ。

大鎌の金術に対し、封華は包丁ほどの小さな刀を取り出した。

「おらっ！ 死んじゃえ！」

小刀を苦無クナイのように構えた封華は、まっすぐ俺の懐を狙ってきた。

「ほお……なかなか速いな」

幾手も繰り出される斬りつけを最小限の動きで避けながら封華に話す。

「あはははは、ありがと」

不気味な笑いを浮かべながら封華も答える。

「でもま」

腰に掛けたアメノムラクモに手を添える。

「すっげー遅いけどな？」

一瞬の隙を突いて、通り抜け様に『月夜見つくよみ』を放ち、封華を切り裂く。

「……そのアザ。やはりお前、らせ——ツウウウ！？」

「あんたふざけんじやないよ！ 仮にも恋する乙女の服なんか切り裂いて！」

封華が真っ赤になって小刀を投げつけた。

「え？ そうなの？ だがまあ、安心しろ」

「……何がよ」

俺は後ろで待機する雪姫を指す。

「あいつは両方ともいける奴だ」

「あんた達の性癖なんか知らないわよ！ もー！ 私着替えてくる

！ 金桁！ あんた私のあられもない格好みたんだから、覚悟してなさい！」

「俺を巻き込むのか！？」

よし、一人減った。いや、まさかまた来るのか？ それは遠慮したい……。

「まあいいか。金桁、貴様はここで死ね」

言うと同時に金桁に向かっていく。

「ふ。無族にしてはなかなかの動き。だが、——これならどうだあ
！！」

「なっ！？」

金桁は大鎌を構えると、ぶんぶん振り回した。

確かに近づけないけど！

「なんちゃって」

「っ！？」

いきなり金桁の頭上に鎌が現れたかと思うと、すさまじい速さで振り下ろされた。

「……さっきの回転は遠心力をつける為だった訳か」

「その通り。よく避けたな。かなり力をこめたのだが」

「はっ。速さで俺に勝とうなんざ百万年早いぜ」

「——成る程。では俺も、少し本気を出そう」

そう言って金桁は体勢を低くした。俺も同じように低く構える。

「羅刹が俺の速さに勝てないって事、思い知らせてやるよ」
二人は同時に走り出した。

妖刀 アメノムラクモ（前書き）

だめだ。主人公がチート過ぎる。

妖刀 アメノムラクモ

ガキイインッ！

もう何合目かも分からないほど、二つの刃はぶつかり合った。

「クソッ。羅刹って思ったより強いな……」

「そいつは光栄だな」

色々試してみたが、こいつは完全に俺の速さについてくる。それどころか、余裕さえありそうだ。

「どうやらもう運動って訳にもいかなそうだ……。しかたねえ。ちつとばかり本気出すか……」

「ほう、まだ早くなる余地があったか。だが、もう諦めろ。お前は俺に会った時点で負けと決まっている」

「ハッ。ほざけ」

その言葉を合図に、これまでとは段違いの速さで『風神』を繰り出す。

「その鎌ごと切り裂いてやるよッ！」

衝撃波によって生み出された真空の刃がまさに鎌を切断しようとしたその時だ。

「甘いな」

瞬間移動でもしたかのように俺の右側へと回り込んだ金桁は、俺に向かって鎌を振り上げた。

「っ！？」

とっさの判断で鉄鞘を鎌に合わせていなす。防ぐもんなら、鉄鞘はひしゃげ、俺だって斬られはしないものの相当な怪我になっていただろう。

「これならどうだ？」

「がっ！」

腹部を蹴られ、重心が前に傾いていた俺は受身もとれず、地面を転がった。

「とっさの判断は誉めてやるが、その攻撃が一段だけとは思うな」
「貴様……！」

刀を突きたて、ゆっくりと起き上がる。

「……もういい」

「何？」

金桁が聞き返す。

「……もう何も考えねえ……。お前、殺す」

その言葉に反応するように、刀『アメノムラクモ』が鈍く、紅く光る。

「む？」

「ああ……お前には教えてなかったな。この『アメノムラクモ』ってやつはな、ある有名妖し鍛冶屋が作った、その名の通り『妖刀』なんだよ」

「ほう」

「んでその能力……のが……」
ゆっくりと刀を天に向ける。

「刃の分散だ——妖刀、『アメノムラクモ』」

切っ先が中天に上ったところで、刃が崩れた。

「金桁、お前は果報者だ。この状態の俺なんて、そうそう拝めるモンじゃねえぜ」

空中に漂う刃は、未だに紅い光を灯し、まるで火の粉のようにも見える。

「終わりだな」

刀の中心なかこだけになった『アメノムラクモ』を振るうと、それに合わせるように何百という小さな刃が紅い軌跡を残して金桁に向かっていく。

「随分、急ぐのだな」

「急ぐ？ 当たり前だ。俺は眠いんだよ」

直線的に飛ばした為に避けられた刃を、引き戻すように中心を振る。

「なるほど、この分散した刃とその中心を妖力で繋ぎ止め、鞭のよう
に振るうことが出来るわけか……」

「まあそんな所だ。だが、いいのか？ そんなに余裕そうにして」

「甘いな。お前は忘れている」

迫り来る無数の刃を避け、残った刃は弾いて言う。

だが、弾いたところで何も変わらない。再び刃の群れに戻るだけだ。

「ここにはもう一人いることを！」

「っ！？」

キーン！

「ちっ！ 外したか！」

何かが刃に防がれた音と、聞き覚えのある声。

「本当に戻ってきたのか……」

「あはははは、あれだけやられて戻ってこない訳ないでしょ」

「まあ、いいだろう。別に一人増えたところで俺の勝ちに変わりない。……行くぞ」

低くしゃがみ、先ずは金桁に狙いを絞る。

「式の型、『天照』」

無数の刃のせいで、細かい真空の刃がいくつも出来る。

「ふんっ！」

金桁は、鎌の持ち手を真ん中に持つと、勢いよく回した。

真空の刃は、回転する鎌によって防がれた。

「次は俺達の番だ」

俺が攻撃体勢に入る前に金桁が大鎌を思い切り投げた。

それをしゃがんで避けると、後ろで何かが木に刺さるような音がした。

「任せて金桁！ はあ！」

後ろで封華の声がした。振り向くと、先程金桁が投げた大鎌は木に突き刺さり、それを足場にして封華が空中より襲い掛かってきた。ぎりぎりまで引きつけ、まさに小刀が振り下ろされようとする瞬間

間に刀を振った。

「っ!?! あっ!」

いくら戦闘能力の高い羅刹であろうと、空中で避けることは不可能だ。いくつもの刃が封華に突き刺さる。

そのまま上に振ると、封華の身体左半分は鮮血で真っ赤に染まる。

「ああああ!! クソッ! このガキが!」

とうとう切れたのか、凄まじい速さで何手もの斬撃を繰り出してきた。

だが、その攻撃にも焦らず、刃を振るい続けることで封華を一定距離以上近づけないようにする。

さすがの封華にも疲れが見えてきたのか、一瞬攻撃の手が緩む。

その一瞬の隙を俺は見逃さない。

「くっ……うう!」

「……安心しろ。俺は無闇に殺生などしない。……だが、その右足、二度と動かねえようにしてやる」

相手の返事など待たず、問答無用で封華の右足を斬り捨てる。

「貴、様あ……! 私はまだ……」

「もういいぞ。封華」

突然後ろから声がした。慌てて振り向き、妖刀を構える。

「もういい。お前はそこで待っている。こいつは俺が片付ける」

「あぐ……でも私まだ動けるし……」

「そういう問題ではない」

そう言うと金桁は大鎌を地面に突きたて、諭すように言う。

「お前、龍牙^{りゅうが}はどうするつもりだ。あんなガキ、俺では養えん。今は命の方が大事だ」

え? あれ?

「お、おい。ちょっと待て。確認していいか?」

「何だ」

「えっと……お前ら、夫婦ですか?」

「そうよ」

「ええ!？」

「てことは良介はー。二人の愛を引き裂く悪役になってるわけだ？」

「要らんこと言ってるじゃねえ雪姫!　　というか本当かそれ真だよなあそれもそうだよなあ!」

なんてことしてんだ俺。救えねえー。いたたまれねえー。

「まあ、御託はいい」

「衝撃の事実を御託と言うかお前」

「貴様の首は俺がもらう」

「ハッ。いいのか?　こんな安っぽい首で」

「いや、そうでもないな」

さっきから金桁が普通に対応できるのは、俺が妖刀を刀に戻したからだ。

「上刻の半分か(約十分)……。お前はどうかやら相当の精神力をもっているようだな」

「そりゃありがとうよ」

残念ながら、妖刀の状態にするのはかなり体力を使い、並みの人間では発動すら難しい。ここまでもったのは日々の鍛錬のお陰だ。

「貴様には腸煮えくり返るほど腹が立つが、その能力だけは感心する。無族にしては、な」

「ふん。あまりおしゃべりをしている暇もないぞ」

「そうだな。一刻もはやく封華を助けてやりたいものだ」

二人同時に走り出す。

すれ違い様に『風神』を繰り出す。が、大鎌に防がれた。

そのまま走りぬけ、方向転換をするとすぐ目の前に金桁が大鎌を振り上げて迫っていた。

刀を振ると見せかけて鉄鞘で腹を打つ。

「それは攻撃か？」

「ハッ」

さすがに、戦闘種族。打撃技はほとんど効果はなさそうだ。

俺が真空刃技を繰り出せば総てあの大鎌に防がれる。攻撃系統を

変えるべきなのかもしれない。

「五ノ型、『天津神』^{あまつかみ}」

速さを極限まで上げ、乱れ撃ちのように斬撃を繰り出すと、自分の周りに刃を纏ったように、近づく者を全て斬り捨てる。

「が、一定の距離さえ置いてしまえば大したことはないな」

「甘いな」

『天津神』を発動したまま金桁に走る。流石の大鎌でも、これを全て防げることはないはず。

「はっ！」

「ぐっ!？」

ところが金桁は、防ぐわけでもなく、柄の方を俺に向けて突いてきた。

まっすぐ鳩尾を打たれた俺は、激痛に思わず手で抑えた。

「貰った」

その言葉を聞いた瞬間、地面に小さくしゃがみ込む。そして、足元を刀で薙ぐ。

「だから、甘いと言っている」

金桁は柄を地面に立て、俺の刀を防ぐと、回転させて思いっきり頭に叩きつけてきた。

「っ!!」

脳が揺れ、一瞬意識を失いかける。だが、金桁はさらに攻撃を仕掛けてきた。

そのまま回転させ、こんどは刃の面で俺の首を狙ってくる。しゃがんだままの俺は避けることは出来ず、鉄鞘で刃ではなく、柄の部分で受け止めた。

「これならどうだ？」

金桁は鎌を思い切り引く。鉄鞘を巻き込んだ鎌は、握っている左腕を切断しようとせまっていた。

「っがあ！」

鉄鞘を刃の面に向けたので切断は避けたものの、腕を斬るには十

分な時間があった。

血が溢れた左腕を押さえながら、転がって逃げる。

「ようやく当たったか……。まったく、無族ごときにここまでてこずるとは……」

「ああああ……」

久々に感じる痛烈な痛みにも、情けなくも声が出る。

「お前……お前……！ 俺の腕をオ……！ 殺してやるぞおおお！！」

「あつ、良介！」

雪姫の声が聞こえた気がするが、もう遅い。一度こうなってしまう俺にも止められない。それが忌み子たる所以だ。

「神技、囚ノ型！ 『刹那』！」

まるで自分が何かに乗っ取られたように、口から勝手に言葉が流れる。

刀を持ったまま金桁に向かう。自分の身体なのかと疑うほど速く。

「む。速いな。これまでとは段違いに」

大鎌を構えた金桁は俺の出方を窺うようにその場を動かない。

「死ねえええ！！」

神速で振られた刀は、やはり柄に防がれてしまう。

「ぐあ！？」

走ってきた勢いのままの俺の身体は、図体の大きな金桁すらふっ飛ばしてしまうほどの蹴りを放った。金桁が無様に地面に転がる。

転がり、止まる前に金桁に追いついた俺は刀を振り上げた。

パァンッ！

突然背中中の辺りで大きな音が鳴り、俺は刀を振り上げたまま動きを止める。

「……あ？」

何故だ。身体が動かない。

「……なんだ？」

死を覚悟して、目を閉じていた金桁も目を開ける。

「ごめん良介。しばらく動かないで」

「……いや、動けないんだが」

あれ？ 口が俺の意思で動く……。

「もう大丈夫みたいね。良かった。もう動いていいよ」

言われた俺は、振り上げた刀を躊躇なく振り下ろした。

「……何？」

金桁は、てっきり死んだものだったのだろうか。不思議そうに俺を見やる。

「……言っただけだ。俺は無駄な殺生はしないと。勿論、場合によるが。今ここで貴様らがここから去ると言うのなら、お前のその大鎌と、封華の小刀だけでもらっていく。それが嫌ならここで止めを刺してやってもいいぞ」

立ち上がりながら金桁に提案する。

「……命が惜しい、か」

やがて、そう、ぽつりと呟いた。

「なんだと？」

「ふ、情けないものだ。一度覚悟をしても、やはり自分の命は惜しいものだ。いいだろう。今日のところは退いてやる」

「今日のところは？」

「ああ、いつかまた、次はお前を殺しにくるさ」

「来るなんての。……まあいい。雪姫、封華の手当てしとけ」

「はいよう」

大鎌を拾い上げ、先程からこちらを見るばかりで一言も喋らなかった封華に近寄る。

「よう。生きてるか？」

「うるさい。今すぐにでもお前を……」

「それだけ言えりゃ十分だ……っと。これだな」

そばに落ちていた小刀を拾い上げる。

「おら。鞘も渡せ」

「……ち。分かったよ」

懷を探り、小刀の鞘を渡してくる。それを受け取ると、大鎌と一緒に荷台へ放り投げる。

「……お前はなぜそこまでする。俺達はお前ら無族を殺すために生きていくようなものだぞ」

「そりゃ悲しい生き方だな」

焚き木に火をつけながら金桁に返事する。

「言ったように無駄な殺生はしないんだよ。あ、でも盗賊は別だぜ？ 面倒くせえし、実際排除命令がでてるらしいしな。だが、いくらお前達が俺達の命を狙う危険種だとしても、俺はその精神を曲げるつもりはない」

「……そうか」

それきり、金桁は夜空を見上げたまま押し黙る。

「……綺麗な、月だな。鬼が出そうな程に」

「……鬼か。そういやここらは鬼が住んでるんだっけか」

「実際にはもっと南に下ったところらしい」

「ほおう……」

その夜、月は朝日が昇るまで輝き続けた。

新たな刺客（前書き）

いや、多分刺客じゃないです

新たな刺客

「……ふぁー」

いつの間にか寝てしまったようだ。木が生い茂っているために薄暗いが、木々の間から太陽を見ることが出来た。

「あれ、あいつら……」

辺りを見回しても、金桁と封華の姿はなかった。寝ている間にどこかへ行ってしまったのだろうか。

「……まあ、いいか」

寝首を掻くぐらい簡単だったろうに。それとも起きている時じゃないと面白くないとか。

「おい、雪姫。おーきーろー」

「……うーん。あと二日……」

「二日ってどれだけ寝るつもりだよ！ さっさと起きろ！」

「はぁーい……」

ゆっくりと毛布から雪姫が出てくる。

「ふうあああ……。ここどこだっけえー？」

「東山だ。おら、さっさと帰るぞ」

雪姫の返事を待たず、自分の荷物を荷台に乗せる。

「あー待ってよう……って、どうせ良介じゃ馬車動かせないじゃないかい」

「それが分かってるならさっさとしろよ！」

自分達の根城につくと、まず荷物を降ろす。

「じゃ、雪姫。これ質屋に入れてこい」

「えー？ 私ー？」

「ったり前だ。お前ずっと家にいられると思うなよ。つーか今回の件はお前の責任だろうが」

「ちえー……まあいいや。じゃ行ってくるねー」

「おう。つかまったりするんじゃないぞ」

「はぁーい」

雪姫を見送り、自分は家に戻る。

「あ、刀研がねえと……」

アメノムラクモを取り出し、どこからか砥石を持ってくる。

金衾達との戦闘のせいでいくらか刃こぼれしている。

「あー血いついてら。仕方ねえ、洗ってから……と」

一通り血を洗い流し、丁寧に研ぐ。剣速が速いものだから余り切れ味は気にしなくてもいい様な気がするが、鋭さによって真空刃の伸びが変わるのでできる限り研ぐ様にしている。

「……よし、こんなもんか」

刀を鞘に戻し、適当な場所へ投げる。

そうして、暫くぼーつとしてしていると雪姫が帰ってきた。

「あれ？ 随分早かったな」

「んー？ そう？ まあ、はいこれ。お金」

雪姫から金を受け取る。

「ふーん……まあ、それなりの金額だな。まあいいや」

「今日はどうするの？」

「んー……。別にする事もねえしな……。適当でいいんじゃないか？」

「じゃ適当に寝てるねえ」

「……好きにしろ」

と、言ったものの自分も特にやることがないのでその辺に寝っ転がる。

辺りが静かになると外の音が家に流れてくる。

鳥のさえずり、そばを流れる川音、風の通り抜ける音。

「……すう……」

「で、こいつはホントに寝てやがるし」

だが、本当に眠くなるほど、静かで、それが心地良かった。

「……やべえ……俺も眠くなってきた……」

雪姫に加え、俺まで寝てしまつては危険だ。静かでも、この辺りには未だに盗賊がうろついているのだから。

寝てしまわないように、体を起こし外へ出る。透き通るほどの青い空だ。

「……いや絶景かな」

「うおっ!？」

いつの間にやら後ろに見覚えのない若い男が立っていた。

「誰だよお前」

「ああ。自己紹介が遅れたかな。僕の名前は『田南部 たなべ 白夜 びやくや っ

うかな。宜しく」

「お、おう……」

あっけなくあちらに流れをもっていられる。

「それでだね、少し聞きたい事があるかな」

「何だよ」

「……どこ?」

先程の男は今日の前で飯をかつ喰らっている。

「ったく。蓋を開ければ名前しか分からねえんじゃねえか……」

「そうかな。まあ、所在が分からないんじゃ流れ者でもいいんじやないかな」

「そういう問題じゃねえっての」

男は名前以外の事を覚えていないようで、身のまわりに関する質問には首を傾げてばかりだった。

「ったく。妖怪とかじゃねえんだろうな?」

「それはないと思うかな。特に力を使えるわけでもないし……」

「ふん。言ってみただけだ」

「うん。よしおかわり」

「黙れ馬鹿。図々しいだろうが」

「ちえーつれないなー全く。で、この無駄にボロい家が君の家？」

「うるせえ！俺だって好きで住んでるんじゃないやねえんだよ！」

思わず声が大きくなる。

「へえー……。じゃ君も流れ者？」

「いや違うが」

「ふーん……。まあ、暫くお世話になりますー」

「ああ……。待てやコラ」

着物から食器をとりだし、食べ終わったものと一緒に洗おうとしている白夜の肩をつかむ。

「ん？何？」

「何じゃねえよ。何でお前がここに居候する事になってやがる」

「え？居候？」

「そうだ」

「居住じゃないの？」

「聞いているのは言い方じゃねえよ！何でお前が住むんだよここに！」

「何でって、僕所在全然分らないし。流れからしてここにお世話になろうかと」

「どんな流れだ！」

「たっだいまー」

そこへ、今まで寝ていた雪姫が目を覚ます。

「おい、なんで起きてただいまなんだ」

「いいじゃん。ていうかさあー誰それ」

雪姫が白夜を指さして言う。

「いや、なんか――」

「どうも初めまして白夜っていいいます」

無駄に爽やかに自己紹介する。

「なんでいるの？」

「ごもつともだ。」

「……なるほどねー。つまり白夜さんは自分の境遇が分からず、さまよってたらなんか黄昏てる良介がいたから後ろに立って驚かしてやろうと」

「そう言うこと」

「で、白夜さんとしてはここに住まわせて欲しいと」

「理解が早くて助かるね」

「んー……」

流石の雪姫も考え込む。

「な、やっぱ止めたほうが……」

「いいんじゃない？」

「っておい！ あっさり受け入れるな！」

「えー？ だって可哀想じゃん。別に追い出す理由もないし」

「いやまあ……確かにそうなんだが……」

考えても、雪姫の言うとおり追い出す理由はない。

「じゃいいじゃん」

「はあ……もう好きにしろ……」

ここで俺は全てを放棄した。

「おい白夜」

「何？」

「ここに住む以上何もせずにはいられると思うなよ」

「じゃあ、何すればいいのかな？」

「先日依頼が入った。お前のテストも兼ねて今日の夕方作戦を展開する」

「……穏やかじゃなさそうな依頼だね」

依頼（前）（前書き）

初その他絵師様キャラ登場ですよ
本編終わってるけどね、気にせずいきますよ

依頼（前）

「ホントにやるのー？」

「ああ。まあ戦は嫌いじゃねえし、何より相手は羅刹だしな」

「むー……」

「何だよ。別にいいだろ？　好きでやってるわけだし」

「死んだら終わりじゃん」

「まあそれが一運命なんだろうっよ！」

荷台を飛び降り、地面に降り立つ。

「いやあ、なんかこう、出そうだね」

白夜が東山を見て戦^{おの}く。

「白夜。お前武器とかないのか？」

「ん？　武器なら常に持ち歩いているさ」

手をひらひらさせて答える。

「ならいいが。いいか。死んだらお前は終わりだ。せいぜい足を引っ張るなよ」

「りょうかいっ」と

馬をふもとに止めさせ、山へと入る。……まさか二日連続で入ることになるうとは。

「で、そのらせつ、とやらはどこにいるんだい？」

「適当に歩いてれば向こうから現れるさ」

「適当なんだ……」

雪姫は馬の見張りも兼ねて置いてきた。

「そうだ。白夜はどんな攻撃をするんだ？」

「んー？　そうだなあ……。例えば……」

ヒュッ

そんな風切り音と共に目の前を何かが横切った。

「やっぱり避けられた？　まあ本気じゃないけどね？　だいたいこんなものかな？」

「いや全然分かんないし。説明しろよ」

「えーしょーがないなー。まあつまり、刃に糸くっつけて飛ばして
るのさ。張った状態なら肉とかも切れるよ」

「なるほどな。趣味悪」

「美学だよ。そういう君は……刀か。日本人だねー」

「斬られてみるかこの野郎」

「物騒な奴は好かれないよー？」

いつの間にか完全に登山のようになっていた。話しながら山をぶ
らつく。

「ん」

「どしたの？」

「いや。近くに気配がする……。だが殺気じゃねえ。なにか……。こ
ちらを窺うような視線が二、三……」

「よく分かるね？ 全然分かんない」

「出てきやがれ。いるのは分かってるんだよ」

すると、茂みの奥から声がした。

『青ちゃん青ちゃん。どうする？ バレちゃったよ？』

『出て行くしかないだろ。羅刹の類ではなさそうだしな』

すぐに、視線の主が姿を現した。

一人は隻髪隻眼の少年で、どうやら左腕がない。もう一人は茶色
がかった髪で、向日葵柄の服が目立つ。

「なんだお前達は。羅刹ではないだろうが」

「お前達こそなんでこんな所にいる。危険だぞここは」

「分かっている。羅刹だろ？ 俺達はその羅刹を倒しにきたのさ」

「羅刹倒しに？ 誰にそんな事言われたんだか知らないが、お前達
では危険だぞ」

「そんな事もねえよ」

俺がそう言った瞬間、隣の木が倒れる。

「……それに、これだけ速ければ十分だろ」

「青ちゃん。こいつらはどうするの？」

「別に戦いたい訳じゃないしな。ほっとく」

青ちゃん、と呼ばれた男はこちらを一瞥すると何も言わずに去っていった。

「あー待ってよ青ちゃん！」

次いで、向日葵柄の服を着た少年も小走りで追いかけていった。

「……で、お前はいつまで隠れてるんだ？」

「いや、別に隠れてた訳じゃないさ」

「じゃあ何だよ」

「いやね、僕所在全然分かんないじゃない？　それで混乱を招かないようにと思ってね」

別に隠れる必要はなさそうなんだが……。

「まあいいだろ。それよりおら。お客だ」

僅かに体を後ろへずらす。立っていた場所には槍が突き当たっていた。

「……なんだ女か」

「なんだとはなんだ！」

槍の先に付いた金属の輪が、槍を立てるのに合わせてしゃん、と鳴る。

「で、お前達は盗賊だな？　私が成敗してくれる」

「えっちょ、僕達は……はっ！」

白夜が何かに気づく。

「もしかして君、盗賊？　そして君の名前まだ知らないんだけど」

「ちげえよ。因みに俺は良介な」

言いながら、かなりの速さで放たれた槍をかわす。

「中々速いな……」

「お前は避けてばかりでいいのか？」

だって攻撃したら盗賊扱いされそうだし。

「僕が相手するよ」

風切り音と共に二人の間を糸が横切る。

女は半歩退いた。

「はぁ……結局こうなるのか……俺達は盗賊ってか」

「良介君、下がってくれる？ 君も斬っちゃいそうで怖いから」
なりふり構わずやるつもりらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034r/>

忌み子

2011年4月15日21時10分発行